

50年続いた企業が実践してきたこと 家族のような温かい繋がりの効果

人間関係が希薄になつたと言われる世の中にあって、人との繋がりを大切にしている企業が発展している。

都会の人々に 大自然を味わつてもらう

ある企業が、今年の8月下旬に設立50周年を迎えた。100年以上続く长寿企業が数多くある日本において、それほど珍しいことではないが、50年続けてきた内容には特筆すべきものがあり、お伝えするに値するものがあると考え記事にしてみた。

その会社は「農業生産法人有限会社共済農場」である。一般的には、「ふら

のジャム園共済農場」の名で社会に知られている。利他の精神や共存共栄の精神を表す共済主義精神を実践する企業である。

この農場を起業した故大久保尚志代表は、「夢を理想に、理想を現実に」するべく、共済主義精神という高い理想を掲げ、社会に打ち出そうと強い要旨を掲げている。

企業目標と言うと普通は株主への還元であったり、社員の満足度を上げたり、良い商品の提供といったことがあり、そのためには利益優先で経営する

共済主義では、「我が物を独りせず、他の物を欲せず、自他共存共栄の精神で生活すること」、「自己優先より利他優先の精神のもとに社会人としての義務を全うすること」、「無駄を省いた生活を送り、必要と思われるだけ消費し、余財を社会に還元すること」といった要旨を掲げている。

雄大な景色を望める展望台。故大久保尚志氏「富良野に寄せて」の碑が心を揺さぶる。



雄大な景色を望める展望台。故大久保尚志氏「富良野に寄せて」の碑が心を揺さぶる。

のが一般的であると思う。しかし、共済農場の発想は利益は後から付いて来るものであり、一番の目的は、共に産み出し、共に助け合い、共に栄えるという共済主義精神を社会に打ち出し、人々に伝えて行くことであるとの基本精神を忘れていない。

企業と一般の人との接点は商品を介すことのみである場合が多いが、共済農場は大自然の中で運営をしている強みを活かして、農場を訪れた方々に心の安らぎを提供する。都会の喧騒の中で慌ただしく生活を送っている方々に、大自然を味わつてもらうことで心が癒されるのである。

ただし、自然と言つても全国に景勝地は無数にあり、自然豊かな観光地は珍しいものではない。共済農場の特徴の一つは人の温かみであり、それを生み出すのは大自然の中での共同生活にあると言える。近くにコンビニエンスストアもない辺境の地で、社員は共同生活をして助け合いながら生活をしている。そして、夏休みなどの長期休暇を利用して多くの若者がアルバイトスタッフとして訪れ、一緒に共同生活を

送る。大自然の中で寝食を共にしながら、共済精神を体感するのである。

助け合いの精神が心地良い

社員は相手の喜びや幸せを願つて、見返りを求めるこなしに無償の愛情を注ぎ、共同生活をする若者はその家族的な温もりや、人の優しさを肌で感じ心に刻まる。利他の精神で動くと、自分は相手のためを思つて動くが、巡り巡つて他の人が実践する利他の精神が自身に還つてくる。その助け合い、心の掛け合い、思い合うのが心地良く、自分さえ良ければ良いとの価値観から、他人を思いやる価値観へと大きく変えることができるるのである。

家族であれば、見返りを求めることがなく、家族のために尽くすということは容易にできることだと思う。しかし、相手を思いやるような言動を家族でない人にでもできるようになれば、穏やかな、温もりのある空間が社会に拡がっていく。社会を良くしていくには、政治や国の統治体制によつて上から抑えつけるだけでは上手くいかない。人々

の人間性や文化レベルが向上して、全体のレベルが上がらないと長続きはないだろう。

また、争いが起ころのはそれぞれの相違点を違いとして捉え、排斥しようとするからだ。そうではなく、違いを個性としてお互いに認め合い、共に助け合つて行くことによつて発展し、共に栄えていかなければならぬ。一人ひとりが助け合う精神を身に付けて、それぞれが共存共栄を図るべく実践して行かないとは現実できないと思う。

社会は、人間関係が希薄になり、個人主義が拡がつていると言われている。また、スマホやSNSの活用で繋がりは増えたとしても、個々の関係性が薄い人も多くいるようだ。若者が共同生活の中から、血の繋がりはなくとも家族のような繋がりを感じ、その濃密な人間関係から人生觀が転換する若者も少なからずいることを見聞きしてきた。このような草の根的な実践を根気強く続けることが、一人の人間、そして社会に良い影響を与える大きな力になつてゐることを伝えたい。

(宗方弘信)